

{歴史} 関口流抜刀術

関口流抜刀術の根源は、鎌倉幕府倒幕後、果てしなく続く南北朝騒乱の時期に関口家は本家今川家の重臣となって230年間の戦乱を乗り越え安泰をささえた。その生死を経て関口家子々孫々に秘伝として継承されてきた武術である。

関口家は、足利尊氏一門・三河足利長氏の子国氏が今川の祖である。国氏の子太郎基氏が今川家系となる。基氏の弟常氏は今川と名のらず関口と称した。常氏は二代で没したので常氏の弟経国が関口家初代となる。故に関口家は今川家の重臣である。



<家康が築城した浜松城>

今川家の家系は、初代範国(駿河・遠江守護) 二代範氏(駿河・遠江守護)弟は貞世(九州探題・安芸、築後、豊後、肥前、大隈)貞世の弟仲秋(侍所頭人肥前、肥後後江、尾張守護) 三代泰範 四代範政 五代範忠 六代義忠 七代氏親 八代氏輝 九代義元 十代氏真

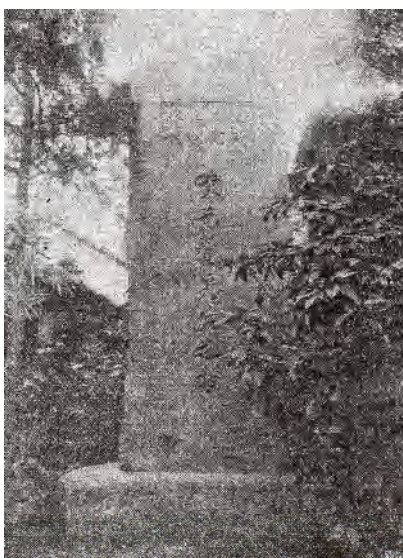
九代今川義元の時、西暦1549年(天文18年)徳川家康が人質(単なる人質ではなく義元に期待された少年)として駿河に着く。家康は8歳から19歳まで府中で生活する。

この頃関口義広(氏広)の娘と徳川家康が結婚した。関口義広の妻は今川義元の妹だから、家康は今川義元の姪と結婚したことになる。

西暦1560年(永禄3年)桶狭間で織田信長の奇襲攻撃により今川義元は没した。

西暦1562年(永禄5年)持舟城主関口刑部少輔(氏広)自刃。今川氏真(義元長男)は関口氏広が徳川に密通したと疑い、暗殺をせまり自刃させた。

西暦1600年(慶長5年)関が原の合戦・慶長5年7月伏見城を守る鳥居元忠が最後に送った使者が西軍の旗上げを告げた。この報告を受け家康は素早く東軍を結成し、関が原の合戦で勝利を得る。



西暦1613年氏心(16歳)は家康につれられて江戸に行った。

西暦1621年(元和7年)明の国の豪商が日本と商取引をする為に二代将軍の謁見を得て江戸入りをした。陳ゲンピンは明の国の豪商の護衛として来た。

陳ゲンピンは幕府の計らいで江戸芝飯倉西久保に有る国昌寺に滞在することになった。明国の商団の世話役の一員として氏心が選ばれた。元和7年から寛永4年までの約3余年間国昌寺に滞在して商取引をした。

陳ゲンピンは豪商の護衛中敵に遭遇すると、動物の様に、跳ねたり、木に飛びついたり、屋根に飛び上がったたりしてまるで猫の様に身が軽く、馬の様に強く人を蹴った。刀を抜かずして相手を仕留めた。この唐の拳法に大いに感動したのが氏心であった。氏心は秘かに唐の拳法を研究した。

<陳ゲンピン記念碑>

西暦1651年参勤交代で江戸に来ていた紀州藩主頼宣は、氏心の長男氏業の剣術がすごかったので幕府に願い出て、紀州につれて行った。

氏業は1654年紀州を辞して江戸に帰るが、東国武者修行の旅に立つ。紀州に仕えたのは3年ぐらいである。



一方江戸関口家道場では、氏業留守中に渋川伴五郎が入門し、氏心の明の拳法と関口流を修得したが、長い太刀で立合うより明の拳法の方が新時代の武術と信じて、明の国の服を着て関口流の道場で明の拳法と古来より伝承されたる関口流の業を混ぜて、古来の業を変えて弟子達に指導するので、氏心は伴五郎を破門した。

東国武者修行と視察の任を終えた氏業は江戸の芝浜松町(駿府の地名)に道場を持った。

伴五郎の業の優れたるをみて、伴五郎の剣と柔は新しき日本の武道界に必要であると認識し再び道場の出入りを許可した。

<渋川伴五郎義方肖像>

西暦 1680 年(延宝 8 年)伴五郎 29 歳にして、関口流の免許皆伝を得て和歌山城下に「道疑館」を開いた。

西暦 1681 年(天和元年)江戸佛乗院で柔術の試合のため江戸に行き、3 回試合をして 3 回とも勝ち有名となる。この年紀州を辞して江戸の芝西久保城山に道場「武義堂」を開いた。当時門弟 3000 人とも称せられた。

後に伴五郎は関口流抜刀術第 2 代目を継ぐ。関口氏心より学んだ柔を更に追求して渋川流柔術の祖となる。

太刀(たち)



太刀は腰に吊るして、刃が下向きのまま下へ抜く。

刀(かたな)



刀は帯に差して、抜きます。

《注》刀剣界では永禄年間までを古刀。関が原の戦い後つまり、慶長元年から新刀と呼ぶ。

関口氏心・陳ゲンピン・白兵戦とは違う辻切り・立会試合そして古刀から新刀へと時代の波に揺れて、時代と共に武術も変わり行く。

<写真は岐阜県関市の居合道専門店農州堂のカatalogより転写しました>

平成 21 年 7 月 22 日午の刻

全日本居合道連盟八段

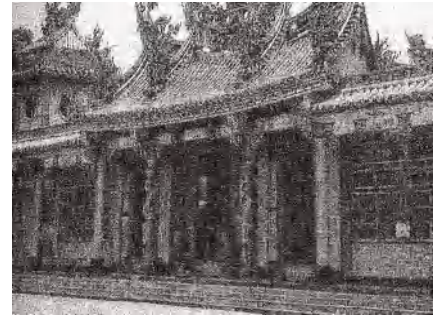
関口流抜刀術第十六代宗家 静林

{台湾で剣術指導} 青木規矩男と亀谷鎮

青木先生は明治 19 年熊本県に生まれた。京都の武徳殿で剣術指南役の募集があった時仕官して、試験に合格したので商業科の教師と武徳殿の指南役となって都入りした。3 年ぐらい武徳殿に居ましたが、台湾の中学に赴任されました。それは・・・

西暦 1895 年中国と日本の両国は馬関条約を締結して日本は台湾を取得して、台湾総督府を設立した。台湾を日本の植民地とした。台湾は急速に人口が増えた。これにより教育が必要となり多くの学校が設立された。

総督府は本国から優秀な人材を抜擢し、台湾全土の教育に力を注いだ。本土と同じく教育を進めるべく人物、青木先生に白羽の矢が立つ。



<台湾台北市土林の惠斉藤宮>

亀谷鎮は明治 34 年岐阜県に生まれた。日本帝国は軍人を募集していた。「軍隊でいろんな事が勉強でき、3 年間ぐらいなら」と思い軽い気持ちで入隊した。

亀谷鎮は 3 年間で文武とも優秀な成績だったので、上官に軍に残るよう云われた。

亀谷は大正 10 年現役兵として、台湾歩兵第一聯隊に入隊する。台湾に着くと、多くの日本人が住んでいた。既に青木先生は高等中学の商業科の教師で、講堂(全校生徒が収容できる校舎)で剣術を指導していた



<台中で藁を切る青木先生>

当時隊の方針としてすべての隊員に趣味とする習い事を義務づけた。亀谷鎮は剣術を学ばんとして入門した。この時青木先生と初めて知り合い、青木先生が昭和 44 年 2 月 11 日午前 8 時 85 歳で没するまで、師弟関係が 59 年間つづいた。その間に戴いた手紙、書など沢山あり習字の手本にと保存してありますが、89 年経った現在も真っ黒な墨のままです。青木先生は戒名の如く「忠」でありました。

亀谷鎮

大正 10 年 月台湾に着く。

昭和 5 年 2 月台北で長女晶子生まれる。

昭和 5 年 3 月歩兵曹長となる。

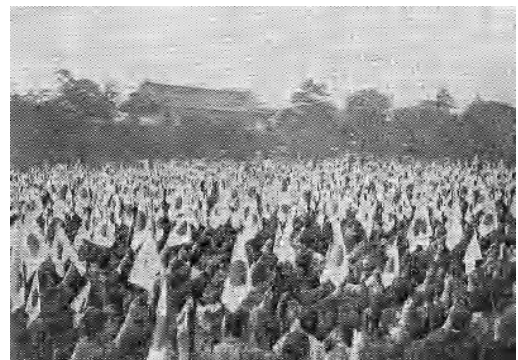
昭和 6 年下士官勤功章を賜る。

昭和 7 年 12 月叙勲八等瑞宝章を賜る。

昭和 8 年 12 月台中で長男邦治生まれる。

昭和 9 年 5 月 4 日皇太子殿下御誕生奉祝昭和

天覧試合に青木先生と亀谷が台湾から参加。



<皇太子殿下の御降誕を奉祝する群集>

台湾駐屯中は軍事演習のみで、休日などはのんびりと海釣りをしたり、現地の人たちに剣術を指導していた。魚と野菜は豊富に食べた。畑のパイナップルを青木先生と亀谷が何本切ったか競いあって楽しんだ。

台湾歩兵第一聯隊特別作業班写真集



自生する竹を利用して舟を作る



ボートを組み合わせて人員移動する



ボートを利用して橋架設



左完成負荷重量約 2200 トン



現地の竹藪を利用して障害物作る



鉄條網の破壊訓練

{関口流抜刀術・業の特徴}その 1

関口流抜刀術は関口流として駿河の国で起こり、駿州(静岡県)島田刀工の太刀で豪壮且つ優美に煌びやかに演ずる業である。

徳川家康が江戸に幕府を開くと、駿府の武将達は江戸に移り住んだ。幕府の政策参勤交代により、江戸の町は全国から武将が集まり、全流派の集合体となった。刀匠界に於いても「我こそは・・・」と名乗る優雅な戦いから、鉄砲の玉の速さをも払い退ける、丈夫で速く抜ける刀の研究が思考錯誤され、新刀が生まれた。江戸の町は関が原で城を失った侍や、外様大名までが江戸に住み、急に人口が増し、無秩序・無防備状態となり、いたる所で辻斬りがはやった。この事態に対応するには、業の研究が必要であると痛感した。時、同じくして唐の武人陳ゲンピンの唐の拳法を習得した氏心は、当流の業に組み入れるべく、業の開発を試みた。

関口流抜刀術の 11 本は殿中居合なので座り業ですが、立会い抜刀 12 本は横抜き、上抜き、下抜き、後抜き、回り抜き、水平抜き、後突抜き、前突抜き、水月突き、落下抜き、伏せ抜きと有る。

家光の時代は立会試合が多かったので、他流の業に対して抜刀(刀の抜き方)を巧みに披露した。この頃江戸城下を歩くと、いきなり辻斬りに合うので之に即応できる業、居合抜き(居合寄せたら即座に抜く)方法を研究し始めた。早く刀を抜くための術且つ如何なる地的条件にも対応出来る業、即ち抜刀術(ばっとうじゅつ)である。

関口氏業はこれらを総合して「関口流抜刀術」(せきぐちりゅうばっとうじゅつ)と称した。

その後 300 年の時を経て、昭和 9 年皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合開催につき全国から名剣士達が参加した。この時熊本 of 青木規矩男、紀州の関口萬平、駿府の関口将、東京の関口流剣士一同の交流がなされ、関口流の業の検討、絵図面等を研究し現在の業に統一された。

この天覧試合頃から武道は益々盛んになり、武士道精神の高揚が高まった。

「心正則剣正 身直則剣直」の額を道場に掲げて、青少年の[直]なる心の育成をした。関口流抜刀術の一本目の業名《抜打先之先身金之事》身の金とは我が身に対して金尺の如く[直]であれと言う事です。

師曰く関口流抜刀術を学ばんとするものは、心を正し直なる精神を培う事肝心なり。



青木規矩男・東京自宅道場



亀谷 鎮・台湾中学



青木規矩男肉筆書

{居合道大会}

全日本居合道連盟は昭和 29 年 5 月に創立された。

昭和 20 年 8 月、日本は敗戦国となり我国は焦土と化し、食する物が無く生きる事に精一杯でした。それでも日本人の底力は強く、大和魂を取り戻し、経済の発展と文化活動にと積極的に動き出した。



昭和 30 年 5 月 第 1 回全日本居合道全国大会が京都で開催された。参加者の多くは宿泊する金銭が無いため、お寺や木の下で寝たそうです。刀が無くて参加申し込みが出来ず、会場で見学していると、「これ使って下さい」と貸してくれる剣士もいて、借り物で試験を受けたとも聞きました。又居合道大会なのに棒術対居合形、空手に対する居合形などさまざまでありました。無条件降伏をした日本がわずか 10 年で、日本固有の伝統文化を復活させた。

昭和 31 年 4 月 29 日天皇誕生慶祝全国各流武道大会が明治神宮外苑相撲場で開催。

昭和 31 年 5 月 4 日 第 2 回全日本居合道全国大会が京都市岡崎公会堂で開催された。

大会顧問中山博道先生、福井春政先生・昇段試験受験者に関口流(抜刀術とは記していない)青木規矩男、亀谷鎮の名前がありました。

昭和 31 年 11 月 11 日 第 1 回全日本居合道関東大会が神奈川県平沼高等学校で開催された。

この大会は松尾剣風先生の資金援助により開催できた。大会名誉顧問

荒木貞夫元陸軍大将、閉会の万歳三唱は河野百錬先生でした。演武種目は各流居合道、棒術、槍術、薙刀術、鎖鎌術、杖術、チギリ木、銃剣術、空手。

青木規矩男先生の勤務校足立第一中学校(東京)生徒数名演武

昭和 31 年 12 月 7 日 8 日 古武道大会・恩賜元離宮二条城で御前試合形式による。

主催大日本武徳会、協賛京都文華典、大会委員長大野熊雄。

昭和 32 年 5 月 4 日 第 3 回全日本居合道全国大会・京都市岡崎公会堂

大会顧問 中山博道 大会委員長 池田勇人

昭和 32 年 5 月 19 日 第 1 回威徳祭古武道大会が威徳殿武道場で開催

昭和 32 年 10 月 11 日 全日本居合道(古武道)大会東京都日本橋白木居ホール

昭和 33 年 5 月 4 日 第 4 回全日本居合道全国大会・大会委員長池田勇人

日本経済も豊かになり、刀も求め易くなりました一番進歩したのが大会参加者名簿であります。第 3 回までは印刷代が無く、横 15cm 縦 21cm の小さな物でした。第 4 回の名簿の表紙はカラー刷りで横 19cm 縦 27cm です。平成 21 年 5 月の全国大会の時と同じです。終戦後わずか 10 数年で現在の基礎を築き上げた先人達の情熱を強く感じます。

平成 21 年 5 月 3 日 第 56 回全日本居合道全国大会・大会会長池田聖昂先生

昭和 20 年 8 月我が国土は焼けてしまいましたが、「国敗れて山河あり」と有名な言葉どおり、丸焼けの大地から新芽が出て、青葉となりました。日本人の心の中に宿る文化精神は居合道連盟を創立させ、且つ現在も脈々と受け継がれています。

[上記の記録は亀谷鎮が大会に参加した時、頂いた名簿を参考にした]

全日本居合道連盟八段

関口流抜刀術第十六代宗家 静林

関口流抜刀術の師陳元賛

陳元賛は、中華民国帰化人。出身地は大明国浙江省杭州に万歴十五年、{我が天正十五年（1587年）}に生まれた。

最初に我国に来たのは、元和五年（1619年）即ち明の天啓元年に豪商の護衛として渡日した。

亀谷鎮の口伝によれば、明国使節団とそれに伴う商人の護衛武官（護衛と通訳）として元和4年頃、二代将軍秀忠に謁見を申し出たが、なかなかお許しがでなかった。

秀忠にとっても、元和元年5月に大阪夏の陣、元和2年4月家康没と多忙な時期でもあった。一行は尾張の殿様に世話になりつつ、商人達は尾張で商取引をしていると、江戸の秀忠将軍より謁見が許された。

三年後の元和七年（1621年）板倉伊賀守の役宅で会見の際、言語が通じない為に林羅山と筆談したと言われている。

つまり、元和五年の頃日本に帰化した唐人が、和人に擬装して支那沿岸に出没し、日本刀を振り回し、支那の商船を襲ってこれを奪い、商人の服装となって返って来た。此の和寇の被害を蒙った福建の商人からの訴えにより、浙江省の船舶司へ注進があったので、省の行政を司っている寧波の道長は奉檄使単鳳翔を我国に派遣し、そのことを幕府に詰問してきた。即ち陳元賛は単鳳翔の随員であって京都に於いて板倉伊賀守とその子周防守重宗に会見、役宅で林羅山と相互に言語が通じないので筆談を以って用を弁じた。

その後戸田為春の邸に於いても私的に会見し、単鳳翔は文字は知れども詩の方は出来ないので、陳元賛が代って詩の贈答をしたと云うことが林羅山の詩集に書かれてある。

☆奉檄使→役所からのふれを告げる役人

☆儒学者林羅山→徳川家康・秀忠・家光・家綱の四代に渡り将軍の侍講をつとめる

☆侍講→天子や皇太子に講義をすること又その役

☆儒学→孔子を学祖とする学派の教え。修己と治人に力を尽くす事によって、人類の幸福、世界平和の実現を目的とする。漢の武帝の時国教とされ、以後清の代まで支配階層の指導理念となった

陳元賛・氏心に拳法を伝う

支邦の使節一行は帰国したが、陳元賛は日本に滞在して各地に周遊したらしく、元和七年より四年後の寛永二年から同四年まで、江戸芝飯倉西久保に在る国昌寺に滞在した事が、同寺の旧記録に伝えられている。曰く「大明国之僧陳元賛寛永二乙丑年四月上旬国昌寺に到来、同四丁卯名月（九月）十六日に被至出立候、右逗留中長州辺乃浪人三浦与治右衛門、磯貝次郎右衛門、福野七郎右衛門、この三人に柔術と申物を被伝候也」とあって、陳元賛が柔術への交渉をもつ記録としては、最も確実性があり、又最初のものと云って差し支えないであろう。

陳元賛が元和七年最初に渡日した時は36歳であって、四年目の寛永二年には39歳であり、41歳の寛永四年まで、前後三年間国昌寺に居住した事が明らかとなる。三人の浪人は後それぞれ三浦流、磯貝流、福野流を成して、門人に伝えたのであるが、陳元賛より教えられたものは、支那に於ける拳法の一つで搏つ、蹴る、突くの手形であって、現在空手と称し或いは唐手又は支那拳法と呼ばれるところの手法に類したものと考えられる。

関口流開祖、関口弥六左衛門氏心は、成長して武芸修行に心を居れ、刀槍の業に達したので天下の良師に逢って学び、尚切磋琢磨の功を積み、諸国を遍歴し、肥前の国長崎に至ったところが、唐の拳法を習い、捕手と云う業をなす老人が居た。この老人は、柔の捕り方を工夫したが、氏心の上達が凡手でないのを見て、工夫の術を氏心に授け学ばしめた。老子の「惟天下至柔馭天下至剛を制す」の語より、水の至りて弱くして能く堅を破るを以って、神心の扱いて二六時中之功夫を成して初めて柔と云う事を教えたものである。

以上は関口流「柔譚」中にある起流の由来書である。之によって見るに、関口氏心が長崎において、柔の捕方を学んだと云う老人が何人で有るか不明であるがその時代から推測すると、寛永十六年柔心四十一歳、陳元賛五十二歳で、陳元賛が再び長崎に渡日した頃に当たり、名前も柔心が明らかにしていないことより察すると、長崎に滞在中の陳元賛その人であると察する。当時彼は明朝滅亡前後であったので、明朝の追及を逃れ、あえて身分を秘して変名を用いた事も考えられる。

柔心の在世の頃、林羅山の「柔説」は寛永十六年の撰であるから、柔心四十一歳に当たり、関口流は、拳法手捕の教えを受けたことになる。

江戸初期に於ける武芸、文芸、工芸の師

陳元賛なる人物に関する記録としては、武術関係の伝書の外、徳川幕府の儒官であった林羅山の詩集及び陳元賛の著書として、尾張藩主義直に献じた「老子通考」及び虎林詩文集、昇庵詩話、長門国誌等がある。名古屋において、深草の僧元政と万治二年に始めて相知り、平生互いに唱和するところをしたためたものを元々唱和集と云い、世にお行われる元政詩文は、我国に於いてこれを奉ずるのは元政を以てはじまり、元政は初め陳元賛によりて袁中郎のあることを知った。

陶器に関する文献、陶器考、工芸鏡にも散見し、尾張に於ける瀬戸物は陳元賛より始まり、その製する陶器は安南風に似て雅致に富み、世に元賛焼きと称して大いに珍重せられ、彼の御深井（みふい）窯に関係したのは尾張藩主義直侯の時に当たり、更に作詞、木彫りなどすこぶる多芸であって、日本人を妻として寛文十一年六月九日八十五歳名古屋で没した。

その墓は名古屋の建中寺に存し、碑には「大明国武林白山広学陳元賛」とあり、その子源太郎元明は、白翁道元と云う。陳元賛は帰化人となりし日より邦語を巧みに使い、人と語るに唐語を用いなかったと伝えられる。尾張では柔術の先師として知る人は少ないが、陶器発達の恩人として却って知られている。

昭和30年開都五百年大東京祭記念各流武道大会が、☆主催全日本古武道連盟・陳元賛事跡顕彰会 ☆後援・協賛外務省・中華民国駐日本国大使館・日華経済協会・日華商貿易公会 ☆来賓祝辞鳩山内閣総理大臣・外務大臣・中華民国特命全権大使

この武道大会に青木規矩男・青木茂一・松本政広・亀谷鎮が出演した時、明治大学記念館に於いて、講演の時頂いた資料より参考にしました。

陳元賛亡命し帰化人となる

陳元賛が日本から帰国してまもなく再渡来し、何故そのまま帰化したかを調べると、1619年にサルホ（遼寧省）で太祖は明の大軍を撃破した。そのため明朝はますます形勢不利となり、我が国に救援を再三再四求めるが時の幕府も島原の乱、鎖国令など国内事情もあって結局救援できなかった。

武術書などを調べると、准王常清一変名して帳振甫を奉じて明の遺臣の陳元賛、朱之瑜、曹数也、帳端図等が日本に亡命したと伝えられる。

徳川幕府に於いては、帳振甫、陳元賛、曹数也を尾張家に、朱之瑜（朱舜水）は光圀の招きで水戸家にそれぞれ預けた。

帳振甫については不明だが皆な文武、武芸等種々の事跡を残して居る。

帳振甫は徳川家から最も優遇されたがすべてを秘匿されたままである。

墓地は名古屋市に在り「公表できません」、初め敷地として五万坪を拝領し、墓標は丘陵の傾斜地に石地蔵が建てられてある。

平成二十一年十二月八日

関口流抜刀術第十六代宗家・静林